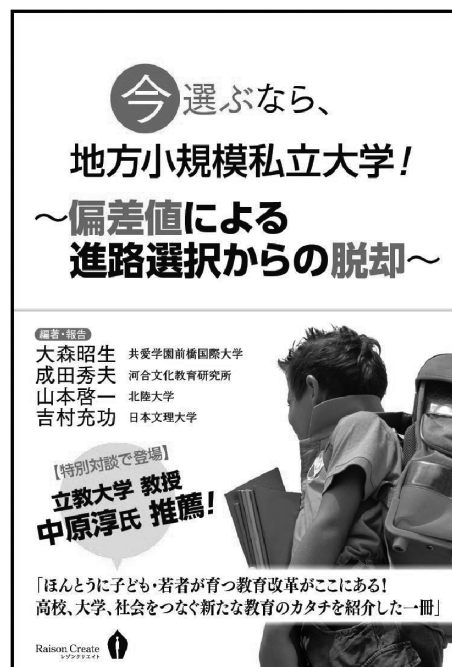


今選ぶなら、地方小規模私立大学！ —偏差値による進路選択からの脱却—

大森昭生¹⁾・成田秀夫²⁾・山本啓一³⁾・
吉村充功⁴⁾・高見大介⁵⁾(編著)

1) 共愛学園前橋国際大学・2) 河合文化教育研究所・
3) 北陸大学・4), 5) 日本文理大学

レゾンクリエイイト(2018年発行)
定価 1,944円(税込)



本書は、2020年に向けた入試改革とそのため求められる大学改革の方向性を示すとともに、それを実現するための改革リーダー達が取ってきた手法等に関して、実践例を取材形式で紹介した内容である。編著者はすべて初年次教育学会会員である。

冒頭には、成田会員と立教大学教授中原淳氏の対談が収録され、大学教育が社会とより接続した内容になっていくべきことの重要性が提唱されている。

第1章から第3章までは、入試改革の概要、教育と社会の接続、また受験生や保護者が注目すべき大学のポイントが概観されるとともに、多面的評価に移行する入試改革が「偏差値信仰」を乗り越えようとする新たな指標づくりの試みであることが指摘されている。

第4章から第6章までは、改革に取り組み、成果をあげている3大学(北陸大学、共愛学園前橋国際大学、日本文理大学)の実践報告で構成されている。各大学の取り組み内容とともに、教職員や学生、自治体職員等の地域関係者のインタビューも収録されており、改革に際して、当事者が実際にどのように考えていたのかが伝わる内容となっている。

3大学の事例からは、教育改革推進のためには、①教職協働を含めた学内の人材開発・組織開発の推進、②初年次教育等の教育改革を通じて偏差値信仰を乗り越えようとする問題意識、③それらの改革を実行するためのリーダーシップの存在、などが必要であることがわかる。

本書は、学術書ではないもの、教育改革の紹介にとどまらず、それを実現するための組織開発の手法の紹介にも重点を置いている点に関して、新規性が存在すると考えている。

なお、編著者の多くは、これまで初年次教育改革を担ってきた関係者でもある。社会との接続を重視する教育は、我が国においては、まずは初年次教育から始まった。今後の大学改革の大きな見取り図は、これまでの初年次教育の成果の延長線上にあるのではなかろうか。